

生涯研修プログラム (2) レクチャーシリーズ (2) 他科領域の専門家に聞く

1) 腎疾患合併妊娠：妊娠は腎の予後に影響を与えるか

埼玉医科大学腎臓内科教授 鈴木 洋 通

腎疾患を有する女性が妊娠した時、その腎疾患が妊娠によりどのような影響を受けるかについては、いくつかの研究報告があるが、必ずしも一定の見解が得られているわけではない。さらに最近ではレニン・アンジオテンシン系(R-A)抑制薬の使用により、腎疾患の予後も大きく変わりつつあり今後もさらに変わっていく可能性が高い。今回は、本邦および海外での成績ならびに自験例について解説を加えたい。妊娠可能年齢にみられる腎疾患で多いものは1. IgA 腎症、2. 慢性糸球体腎炎(本邦では多くはIgA 腎症と考えられている)、3. ループス腎炎、4. 最近では一部腎硬化症例あり、5. ネフローゼ症候群(多くは微小変化群)、6. 糖尿病性腎症、7. 腎移植後があげられる。1. IgA 腎症

に関しては比較的長期間の予後を検討した成績が報告されているが、必ずしも予後に関して一致した成績が得られているわけではない。また、IgA 腎症と気づかずに妊娠し、出産後10数年が経過し末期腎不全で見つけ出された症例もあることより、妊娠中毒症というカテゴリーで出産している症例もかなり多いことが推定される。最近出産年齢の高齢化に伴い腎硬化症や糖尿病性腎症の妊娠例の増加しており今後の大きな課題である。ループス腎炎に関しては妊娠によっても予後が大きく変わらないとするものが多い。頻回再発型のネフローゼ症候群や腎移植後では副腎皮質ステロイドホルモンや免疫抑制薬の使用のもとに妊娠を行っている。

2) 早産低出生体重児の長期予後

東京女子医科大学母子総合医療センター助教授 三 科 潤

本邦では、日本小児科学会新生児委員会により全国の新生児医療施設を対象に5年ごとに超低出生体重児の新生児死亡率の調査が行われている。近年の新生児医療の発展により、1980年代以降の超低出生体重児の生命予後の改善は著しい。1980年には55.3%であった、500グラム以上の超低出生体重児の新生児死亡率は2000年には15.2%にまで低下した。超低出生体重児の中でも更に体重および在胎週数の少ない児の生存が見られるようになり、生存限界はより小さく、より未熟になってきている。厚生労働科学研究により、1990年、1995年、2000年出生の超低出生体重児の3歳、6歳、9歳の全国的な予後調査が実施されており、1990年出生例の3歳時の神経学的障害合併頻度

は、脳性麻痺13%、視覚障害9.5%、聴覚障害2.5%であった。脳性麻痺、視覚障害、聴覚障害の頻度は6歳以降も殆ど変わらないが、知能発達に関しては、知的障害(IQ 70未満)は3歳13.4%、6歳17.5%、9歳16.4%、境界知能(IQ 70以上85未満)は3歳9.6%、6歳18.2%、9歳17.5%と、6歳以降の頻度が高くなった。

出生体重が小さく、未熟な児ほど障害の合併頻度は高くなり、明らかな神経学的障害を持たない場合でも認知能力や学力は低い。欧米からの報告においても、同様に、体重が少ない児は障害の合併頻度が高く、特別な支援を必要とする児が多いとされている。